落ち葉や雑草、生ごみでできる温暖化対策

ひろげよう！
堆肥わくわく運動

「肥沃な野菜畑の１グラムの土には、数億から数千万、数百の微生物（細菌、糸状菌、放線菌、原生生物、藻類など）が生きている。例えて言えば、片手に盛り上げた良い土壌の中には、この地球上の全人口よりはるかに多い生物が生きていることになる!」
「人類は、〈生命（いのち）の時代〉というものをはっきり自覚するか、さもなければ没落していくだろう!」という声が聞こえてくる。」
―E・ヘニッヒ著中村英司訳『生きている土壌―腐植と熟土の生成と働き』（日本有機農業研究会刊）より

◎「堆肥わくわく運動」とは

この運動は、昔ながらの堆肥づくり用の「堆肥框（たいひわく）」を活用して、家庭から出る生ごみを落ち葉や雑草と混ぜて堆肥化することで、温暖化防止キャンペーンを市民自らの手で進めるものです。

◎有機農業・堆肥づくりにあなたも参加してみましょう！

堆肥づくりに、一般の家庭（消費者）、農家、市民農園、学校農園などが積極的に取り組み、食べ物づくりの一端を担うことを通して、多くの人々の有機農業への理解を深めましょう。

◎生産者と消費者が共に協力して、有機農業を育てていきましょう！！

特定非営利活動法人　**日本有機農業研究会**

堆肥わくわく運動の生ごみの堆肥化のポイント

1.　「生ごみ蓋付き堆肥箱」と「堆肥框（わく）」の二つを使う。

生ごみの発酵を早め、悪臭が発生しないように、「生ごみ蓋付き堆肥箱」と　「堆肥框（わく）」の二つを使う。「堆肥框」では、落ち葉などの堆肥材料を、ある程度、堆肥化しておく。

≪生ごみ蓋付き堆肥箱≫　　≪堆肥框≫

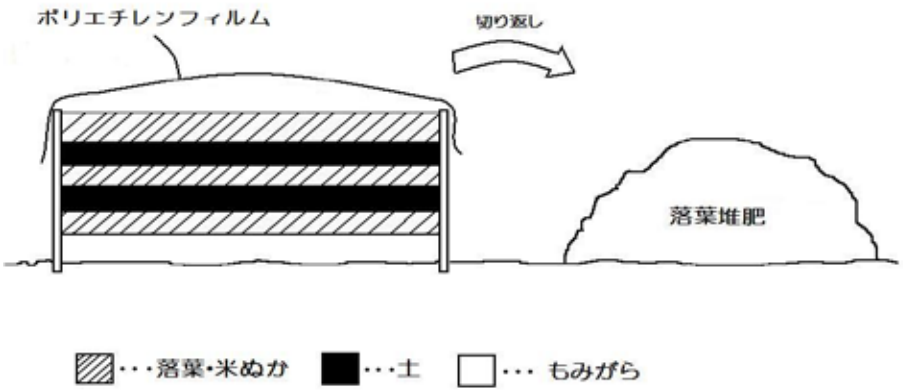
2.　「落ち葉堆肥」をつくる

堆肥框を使い、落ち葉を主体に、もみ殻、ワラ、米ぬか、雑草など、悪臭を放ちにくい材料に適度な水分を与え、分解発酵中の堆肥をつくる。これは、ここでは「落ち葉堆肥」と呼んでいる。

積み込み後、２～４か月で堆肥となる。好気性発酵にするために、２～３週間に一回くらい、切り返しを行う。切り返しは、木框を持ち上げてはずし、隣に据え、積み込んでいた堆肥材料をフォークやスコップで再び積み込み直す。

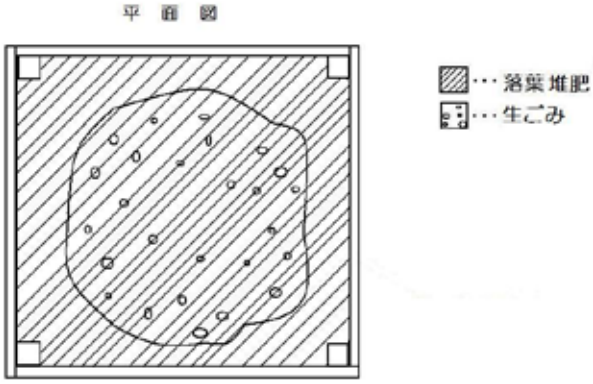
慣れてくれば、また、農家の場合、家畜糞尿、ペット糞尿、作物くずなど、植物質、動物質の有機物を積み込むことが可能である。

≪堆肥枠断面図≫



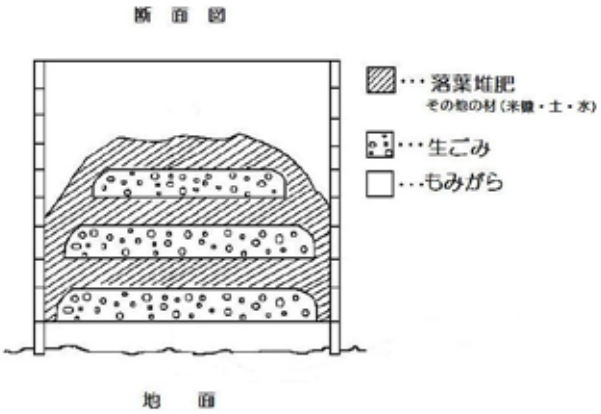
3.「生ごみ蓋付き堆肥箱」を使い、生ごみを堆肥化する。

≪生ごみ蓋付き堆肥箱≫



・作り置きしておいた「落ち葉堆肥」に生ごみを包み込むようにしながら投入する（平面図参照）。
・側面の板には生ごみが触れないようにしながら（臭いがもれないように）、平らになるように積み込む（平面図、断面図参照）。
・窒素分（N）の多い魚・肉類と炭素分（C）の多い野菜類との比率により、できる堆肥のC／N比が異なる。窒素分が多いと発酵温度も高く、肥料成分も高いが臭いも強い。炭素分や土の投入でほどよい堆肥づくりをめざす。

≪生ごみ蓋付き堆肥箱≫



・　毎日の生ごみ投入で箱がいっぱいになってきたら、箱を上に少しずつ持ち上げる。
・低温期には、発酵分解が遅くなるので、堆積初期から発酵分解が進むよう、米ぬかを投入して発熱を促すなど工夫が必要。（電熱線や火力などの熱源は用いない）

・蓋付き堆肥箱内部

生ごみが落ち葉堆肥で包まれている

・堆肥框の切返し作業

堆肥材料を框に積み込む

本冊子作成の協力・実験研究：　埼玉大学大学院経済科学研究科（堀合知子）　指導・堆肥框作成：　魚住道郎

木製の二つの堆肥框を使った「堆肥わくわく運動」のねらい

東京都足立区都市農業公園で

日本有機農業研究会　　魚住　道郎

１．　良質の堆肥を作り、土に入れて健康な“生きた土”をつくり、作物を健康に育て、ひいては家畜や人間の健康をめざす。（有機農業の原理）

２．　家庭から出る生ごみは、他の有機物、すなわち、落ち葉、（農家にあっては）作物残渣（わら、野菜くず、もみ殻、ぬかなど）と混ぜることで良質の堆肥をつくることができる。これらの堆肥化は、資源を有効活用する。（ごみを減らす）

３．　堆肥づくりは、CO_2の有機物化→堆肥化→土中へのCO_2の投入、という働きをもつ。CO_2を土中に貯めることになり、地球温暖化対策のひとつとなる。

４．　生ごみの堆肥化は、幅広く一般市民が参加することができる日常的活動であり、地球温暖化対策への市民参加のひとつの方法となる。

５．　生ごみの堆肥化は、それを通して市民の有機農業への参加のひとつの方法となり、有機農業への理解を助ける。

６．落ち葉（落葉広葉樹）を主原料とした堆肥は良質の腐葉土となり、（農家にとって）有機農業の作物の育苗に欠かせない。これを自前でつくっていく。

７．木製の堆肥框（わく）は移動が容易で、積み上げた時にもはずすことができるので扱いやすい。木框による堆肥づくりを伝承する。

８．木框の材料に、地域・国内の間伐材を使えば、間伐材の需要を喚起し、森林と農業との連携もできる。管理の行き届いた森林は環境にもよい。

有機農業の持つこのような本質的な意義を、「堆肥わくわく運動」を通して理解を広めたい。一人一人ができる地球温暖化対策として生ごみを堆肥化し、植物を育ててみよう。きっと、そのことが自らの足もとを耕すことにつながり、たべものの自給という視点も育っていくのではないかと思う。

特定非営利活動法人　日本有機農業研究会

１１３－００３３　東京都文京区本郷３－１７－１２－５０１

電話　０３－３８１８－３０７８　ＦＡＸ　０３－３８１８－３４１７

メール　info@joaa.net　　ホームページ　http://www.joaa.net